

広島芸術学会活動報告

二〇〇二年七月～二〇〇三年六月

米 門 公 子

▼平成十四年七月十日(水)

第十六回総会・大会案内を兼ねた会報第六十八号を発行。巻頭ページに総会・大会の日程を掲載。「第十六回大会開催に寄せて」と題して、広島市立大学の武藤三千夫氏が、大会の主旨、開催への思いを書いた。それに続き、大会での発表者四人と、シンポジウムへの参加者四人もそれぞれ、レジュメを寄稿した。

今号には例会報告はなく、会員の高山博子氏が、「心の旅」と題する油彩画展の開催にあたり、「聖地を巡る旅」というタイトルでエッセイを寄せた。

▼平成十四年七月二十七日(土)

第十六回総会・大会を広島市立大学国際学部の教室をお借りして開催した。十時から十時半まで総会を開催。それに続き、午前中に二つの研究発表、午後には残り二つの研究発表とシンポジウムを行

った。

総会では、進行役を当学会事務局長の大橋啓二氏が担当。まず最初に代表委員の金田晉氏が開会の挨拶を述べた。続いて委員の水島裕雅氏を議長に選出。委員の菅村亨氏が平成十三年度の事業報告を行った。次に大橋氏が決算報告、続いて監査委員の倉橋清方氏が「平成十三年度の会計帳簿並びに証票類が適正に処理されていること」を報告した。その後、再び菅村氏が平成十四年度の事業計画、大橋氏が予算案を提出し、いずれもそのまま承認された。

十時半から大会を開始、一つ目の発表は広島大学大学院生・王佑心氏が「夏目漱石と林語堂の作家的出発点——ユーモアをめぐる言説の比較考察を通して——」と題した研究発表を行った。日・中近代の代表的な文学者であり、二十世紀初めに西洋に留学した共通の体験を持つ夏目漱石と林語堂。「ユーモア」の力が二人の「個性」の確立といかに結びついているかを明らかにし、「個」の問題が両文学者

の中で、どのように内面化されていったかを考察した。

二つ目は関西学院大学大学院生・後藤健一郎氏の「伊藤若冲制作のいわゆる拓版画について——乗興舟」を中心として——。「動植絵」の制作者として知られる伊藤若冲の濃密着色画の作品群は息を飲ませるほどだが、今回の研究発表では、対極にある拓版画作品を取り上げた。

続いての発表は、国際日本文化センター講師・戦暁梅氏の「富岡鉄斎と呉昌碩の西洋——二十世紀初頭の日・中文人画を考える——」。日本の富岡鉄斎と中国の呉昌碩。西洋美術を前に、日・中文人画の二人の巨匠はどんな西洋観を持ったのか、その姿勢はそれぞれの芸術観にどのように映り、二十世紀初頭の日・中文人画発展にどのように働きかけたかを考察した。

最後の研究発表は民間企業に勤務する泉原雅之氏の「パソコンフトにおける芸術系産学協同開発事例」。テクノロジー分野での産学協同は各所で見られるが、芸術分野ではまれ。泉原氏が勤務する(株)中国サンネット(広島市内)では、地元エリザベト大学に作曲コースを求め、パソコンソフトの制作に成功した。その開発事例を発表した。

そして大会の締めくくりは、シンポジウム「都市の景観」。基調報告を行った広島市現代美術館の松岡剛氏は、へまちをいろいろな視点から読み解くこと、つまり分節化と、それらがどのようにつなが

り、互いの存在を認識できるか、つまり相対化と、そしてそれらが広島市の都市像としてある一つの像を結ぶことの可能性と不可能性について言及した。

続いてパネリストの広島市立大学・伊東敏光氏は制作者の立場から彫刻作品の持つ意味と都市のかかわりについて、同大学・大井健次氏は近年活発に再開発がなされているベルリンの変貌について、児童文学者・中澤晶子氏は歴史的建造物である東京駅と旧同潤会大塚女子アパートメントが果たした都市における役割について発表した。参加者は四十名。

大会終了後、広島市立大学・情報学部棟ラウンジで懇親会を開催した。同大学の吉井章氏には準備から開催まで、すっかりお世話になった。

▼平成十四年十月一日(火)

会報第六十九号を発行。巻頭言は、広島大学や広島修道大学などで中国語と中国文化の講師を務めている袁葉氏が寄稿した。タイトルは「テッセンが叩く鉄扉」。広島市からの依頼で「平和記念資料館」展示の音声ガイドの翻訳とナレーションを担当したことのある同氏が、「平和」であることへの思いを、たおやかに延びる植物のテッセンに寄せて綴った。

報告は広島芸術学会第十六回大会で行われた四つの研究発表とシ

ンポジウム。一つ目は広島大学大学院生・王佑心氏の「夏目漱石と林語道の作家的出発点―ユーモアをめぐる言説の比較考察を通して―」（報告者・大山範子）、二つ目は、関西学院大学大学院生・後藤健一郎氏の「伊藤若冲制作のいわゆる拓版画について―「乗興舟」を中心として―」（報告者・坂田道生）、続いて国際日本文化センター講師・戦暁梅氏の「富岡鉄斎と呉昌碩の西洋―二十世紀初頭の日・中文人画を考える―」（報告者・尹芝恵）、最後は民間企業に勤務する泉原雅之氏の「パソコンソフトにおける芸術系産学協同開発事例」（報告者・亀井克朗）。そしてシンポジウム「都市の景観」の要約（報告者・松田弘）も掲載した。

▼平成十四年十月十三日（日）

十月十二、十三、十四日、第五十三回美学会全国大会が広島大学東千田キャンパスで開催された。この内、十三日のシンポジウム「近代日本の美学と藝術思想のコンテクスト」は広島芸術学会との共催で行われ、広島芸術学会第六十回例会と兼ねることになった。司会は京都大学・岩城見一氏、パネリストは関西学院大学・加藤哲広氏、韓国の藝術総合学校・李仁範氏、台北藝術大学・廖瑾氏、広島大学・青木孝夫氏の四人。シンポジウムの目的は「近代日本の美学あるいは藝術思想と周辺の東アジア（今回はパネリストの関係上、韓国と台湾に限られた）の美学あるいは諸藝術との関わりを明らかにする

ことだった。

加藤氏は「西欧美学の日本への移植―明治期の美学の諸側面―」、李氏は「韓国美学の成立―日本美学との関わりを巡り」、廖氏は「仮説となりつつある台湾美術史の〈定説〉」、青木氏は「近代日本に於ける〈教養主義〉の成立を巡り―もう一つの教養としての〈藝術〉〈遊藝〉の系譜―」と題した報告をそれぞれが行った。報告後の質疑応答で、フロアから「美学や美術史学あるいは藝術における日本と東アジアとの相互の関連について、より踏み込んだ議論を展開すべきではなかったかという意見が出された。しかし、美学において、東アジアという地域、また近代と近世の歴史的つながりは、ようやく注目され始めたところであり、今回のシンポジウムはその第一歩となったのではないか。参加者は四十七名。

▼平成十四年十一月二十五日（月）

会報第七十号を発行。巻頭言は広島大学大学院を終え、バレエ・スタジオ「アンタnte」を広島市内に開設した播野尚子氏が「新たな道」と題して、新しい門出に際しての心境を執筆した。例会報告は十月十三日に広島大学東千田キャンパスで開催された美学会第五十三回全国大会でのシンポジウム「近代日本の美学と藝術思想のコンテクスト」（報告者・長迫英倫）について詳しく内容を掲載した。イベントリポートは、広島で公演された新作能「サダコ―原爆

の子―」の鑑賞記録「世界の平和を求めての地謡聞こえる」を大井健地氏が寄せた。

また、自由コラムには出原均氏が、架け替えが決定した平和大橋・西平和大橋を惜しみ、そして決定の再考を願ひ、「イサム・ノグチの橋の芸術性」と題したエッセイを寄稿した。

▼平成十四年十二月二十一日(土)

第六十一回例会を広島県立美術館講堂で開催した。一つ目の発表は、広島大学大学院生・森園敦氏の「アテナイ陶器画におけるテセウス表現の変化とその背景」。前五世紀前半の英雄テセウスを描いた陶器画を中心に、アテナイ人がいかなる背景をもとにして、テセウスのイメージを作り上げていったかを考察した。

二つ目の発表は早稲田大学大学院生・瀧口美香氏の「ビザンティン福音書写本に見られるキリスト伝サイクルについて」。十二世紀後半の四福音書写本二点をとりあげ、福音書写本を介して、数百年の時間の隔たりを越えて語りかけてくるビザンティンの人々の声に耳を傾けたいと瀧口氏。

研究発表終了後、「ヒロシマハンドベルリングーズ」の皆さまに、クリスマスに因んだ曲を演奏していただいた。例会後、十八時から、県立美術館の近くの「ななしや」で忘年会を開催した。参加者二十五名。

▼平成十五年二月七日(金)

会報第七十一号を発行。巻頭言は亀井克朗氏の「場所の記憶―映画と人生を振り返って―」。映画研究を長く続けている同氏が、映画館斜陽の時代といわれている現在、それでも良質の映画を上映し続けている広島映画館に対する思い、そして自身の映画観を綴った。「映画を見る際に重要なものは、知性でも感性でもなく、(魂)である、と思う。映画と出会うことは(魂)を磨くことであつた」と述べているのがいかに亀井氏らしい。

報告は第六十一回例会で発表した広島大学大学院生・森園敦氏の「アテナイ芸術におけるテセウス表現の変化とその背景」(報告者・尾形太郎)と早稲田大学大学院生・瀧口美香氏の「ビザンティン福音書写本に見られるキリスト伝サイクルについて」(報告者・亀井克朗)を掲載した。

事務局からは久々に新入会員の名前を紹介した。

▼平成十五年二月二十二日(土)

第六十二回例会を、新しく広島市中区袋町に開館した「広島市まちづくり市民交流プラザ・マルチメディアスタジオ」で開催した。一つ目の発表は広島大学大学院生・陳玖君氏の「谷崎潤一郎の映画観」。谷崎の大正期文学はこれまであまり評価されてこなかったが、陳氏はこの時期における創作活動を読み直し、最も注目すべき点と

して、谷崎の映画製作体験を取り上げて考察し、さらに昭和期の作品に及ぼした影響について論じた。

二つ目の発表は袁葉氏の「銀幕の向こうの中国」。同氏は昭和六十年に中国から来日し、現在広島大学、広島修道大学、広島文教女子大学で中国語、中国文化などの講師として教鞭を執っている。今回の発表では、生い立ちを振り返り、時代と人生における映画とのかわりを語った。北京在住の知識人を父に持つ同氏は、下放運動により、農村へ移る。文明的なものから隔絶された生活の中で、粗末な設備ながら時折上映された映画は、同氏にとって、別の世界へと開かれた窓であったのだろう。「スクリーンの前に座るだけで夢が広がった」という言葉が、とても切実で印象的だった。話題は現在へと至り、映画のタイトルのつけ方の違いや、生死観をめぐって日中文化比較論へ広がっていったが、あまりにも話すことが多く、完結しなかったのは残念だった。参加者は三十九名。

▼平成十五年四月十五日(火)

会報第七十二号を発行。巻頭言には、広島大学大学院卒業後、北海学園大学へ就職した大石和久氏が「北海道の春／北海道芸術学会設立」というタイトルで執筆した。近況や北海道の春のようすのほか、「北海道芸術学会」が設立されたことを報告してくれた。そして何よりうれしいニュースは、同氏が、この学会の設立に、そして

現在は委員として運営に深く関わり、活躍しているようすが窺えること。研究発表の報告は、第六十二回例会で発表した広島大学大学院生・陳攻君氏の「谷崎潤一郎の映画観」(報告者・王佑心)と、広島大学・袁葉氏の「銀幕の向こうの中国」(報告者・亀井克朗)を掲載した。

▼平成十五年五月十日(日)

第六十三回例会は野外例会。今回は、東広島市にある企業「サタケ」(当学会法人会員)と「賀茂泉酒造」を見学させていただいた。午後二時に「サタケ・クリスタルビル」入り口付近に集合。「サタケ」のご厚意で、JR西条駅にお迎えのバスを出していただくことができ、JRでやってきた会員は大助かりだった。

「サタケ」は明治二十九年に日本で初の動力精米機を考案・開発し、以来一世紀以上にわたり、穀類加工技術の分野で、世界のトップ企業として、日本はもとより世界百四十カ国への輸出実績がある。この会社の迎賓館ともいえるべき「クリスタルビル」は、社長の佐竹利子氏自らがデザインした洗練されたビルで、日経ニューオフィスを賞を受賞している。

玄関を入った広いホールには、「米」をイメージするガラスの美しいモニュメントが飾られている。制作者は広島在住の宮田洋子さん。また正面階段の壁には、ミロの「拳闘」の巨大なリトグラフが架け

られている。階段を上がっていくとき、ふっと音楽ホールか美術館の中にいるような錯覚を覚えた。VIPルーム、会議室などを次々と見せていただく。時代の最先端を行くモダンな調度品やインテリアの造りと窓から見えるのどかな田園風景が全く異なる雰囲気です、まるで二つの場所に同時にいるようだった。

椰子園では、「琉球八重山ヤシ」が、先々代の佐竹利彦氏によって発見されたものであり、「サタケンチャ・リュウキユウエンシス」の学名を持つことを教わり、びっくり。貴重な椰子(やし)や蘇鉄(そてつ)、またそれらに関する資料を、詳細な説明を拝聴しながら見学した。

最後は、サタケの製品がずらっと並ぶショールーム。みんなが最も関心を示したのは、サタケが開発した家庭用精米器。健康に良い胚芽米を簡単につくれるとあって、すぐその場で購入する人もいた。「賀茂泉酒造」は本来の日本酒の姿を求め、昭和四十年代にいち早く純米酒に取り組んだ蔵であり、辛口で酒通にとても人気がある。

歴史を感じさせる古い玄関をくぐる。まず重森三玲によって作庭された枯山水様式の「寿延庭」を拝見。酒蔵独特のなまこ壁を背景に、庭全体を瀬戸内海の風景に見立てた、閑静な中にも四季の移ろいを感じさせる趣のある庭だった。

酒蔵へ一歩踏み入れると、酒の薫りがほのかに漂っている。酒蔵見学の後、さまざまな種類の酒を試飲させていただいた。好奇心の

あまり試飲し過ぎて、かなり酔っている人もいた。

ここまでの参加者は四十名。見学のあと、十五名が残り、「賀茂泉酒造」の中にある酒泉館の二階で、西条の名物である「美酒鍋」をいただきながら、楽しく懇談した。

〈平成十五年六月三十日現在、法人会員五法人、個人会員二百三十四名(特別会員三名、一般会員二百六名、学生会員二十五名)〉

(こめかど・きみこ 広島芸術学会事務局)